

3. 最近の話題

「歯周病 ―感染性疾患として全身に及ぼす影響―

兵庫医科大学・病理学講座・機能病理部門 大山 秀樹

近年、医療の中における「歯科」の果たすべき役割が、「歯の痛みから解放すること」あるいは「歯の健康管理を行なうこと」から、「全身の健康管理に関わる医療行為」へと変わりつつある。歯周病が健康寿命を脅かす重篤な全身疾患群の発症および症状悪化の危険因子あるいは基礎疾患となることが、多くの疫学的および生物学的な研究から明らかとなってきたからである。

歯周病は、歯と歯肉の境目である歯肉溝から侵入したグラム陰性嫌気性桿菌を主体とする歯周病細菌感染によって引き起こされ、歯槽骨を含めた歯周組織破壊を伴う慢性炎症症状を呈する。歯周病巣局所において細菌および自己由来抗原に対して誘導された様々な免疫応答は、TNF- α などの炎症性サイトカインをはじめとする様々な仲介液性因子の濃度を、局所レベルだけではなく末梢血レベルにおいても上昇させる。歯周病が糖尿病、冠動脈疾患、低体重児出産などの様々な全身疾患および状態に対して負の影響を及ぼすメカニズムは、これら歯周病の慢性炎症反応が引き起こす間接的な影響として、徐々に説明されつつある。

また、その一方で、歯周病細菌の感染が直接的に関与する疾患も多く存在する。その例として感染性心内膜炎が最もよく知られているが、感染性心内膜炎全体の4～7%の症例に歯周病細菌感染が関与するとも言われている。動脈硬化性狭窄病変のため頸動脈内膜切除術によって得られた動脈組織片においても、種々の歯周病細菌のゲノムDNAが検出されたという報告、さらには、脳膿瘍における膿瘍部から歯周病細菌が検出された症例についての報告もある。

本講演では、歯周病細菌感染に起因したと考えられる化膿性肝膿瘍の剖検例を参考症例として取り上げることによって、日常の病理診断を行なう上で歯周病医学をどのように位置づけるかについての考え方を最近の知見をもとに示したい。また、この「Periodontal medicine (歯周医学)」という観点に立って個々の症例を見直すこと、さらには、様々な疾患の病態を考え直すことによって、今後の医科・歯科それぞれの領域における学際的研究の発展が期待される。